

比較教育学会 第53回大会 公開シンポジウム
2017年6月24日(土) 14時45分-17時20分
東京大学本郷キャンパス 安田講堂

教育モデルが国境を越える時代を俯瞰する
—比較教育学の原点にもどる—

日本比較教育学会・東京大学教育学部附属学校教育高度化・効果検証センター 共催
(同時通訳有り)

<プログラム>

14時45分-14時55分

開会の挨拶・趣旨説明

恒吉僚子(東京大学大学院教育学研究科・教授)(司会)

14時55分-15時20分

フィンランドの教育モデル

Riitta Vänskä (Board Member at Invalidisäätiö, Program Manager, Education
Export Finland)

15時20分-15時45分

シンガポールの教育モデル

Goh Chor Boon (Associate Dean, National Institute of Education, Singapore)

15時45分-16時10分

日本の教育モデル

佐藤学(学習院大学文学部・教授)

休憩 16時10分-16時25分

16時25分-16時35分

討論者 丸山英樹(上智大学グローバル教育センター・准教授)

16時35分-17時20分

全体議論

<論点>

モデル借用自体は比較教育学が古くから関心を寄せてきたテーマである。植民地支配の形で強制的性格を持つものも含め、歴史的にも世界中で見られる現象である。だが、我々の時代の教育的意味での特徴は、様々な教育モデルが国民国家の枠を越えて今まで以上に容易にグローバルに拡散してゆくことであろう。PISA、TIMSSなどの国際学力テストにおいて「成功例」とされる国々の教育モデルからの示唆を諸外国が求め、そうした、ある国やある文化的文脈で生まれた教育モデルがたやすくインターネット等で拡散し、ビジネスとして成立してゆく。

こうした時代状況を、我々はどのように理解し、対応すべきなのであろうか？ある国から生まれたモデルが、グローバル化、あるいは、かつてない規模で他国に移植される中で、何が起き、どのようなメカニズムが働いているのか。モデル借用は比較教育学の対象テーマで長くあり続けてきたが、そこからどのような知見が得られ、新しいグローバルビジネス時代の教育モデル借用に対して何が提示できるのか。こうした問いをフィンランド、シンガポール、日本のいずれも世界的に関心を持たれている教育モデルの具体例を通して考える。